

シンポジウム  
「日本語教育インターンシップ・  
国際日本語教育実習  
- 海外における日本語教育とその問題点 - 」

「キルギス共和国における日本語教育の概要」

吉野 志穂

1. キルギス共和国の概要

中央アジアにある旧ソビエト連邦の共和国であり、独立国家共同体(CIS)の加盟国。首都はビシュケク。7つの州( oblastlar )と2つの特別市( shaar )からなる。公用語はキルギス語・ロシア語だが、ソ連時代のロシア語教育の影響で、公共機関においてはロシア語使用が頻繁である。

2. キルギス共和国の教育制度

(1)初等中等教育機関( シュコーラ ): 小学校から高校までの初等・中等一貫教育 11 年制の学校。ロシア語で授業を行う学校とキルギス語で授業を行う学校がある。外国語の選択授業は8年生から11年生までが対象。キルギス語使用の学校はロシア語、ロシア語使用の学校はキルギス語が必修。日本語が設置されている学校は東洋リツェと第一寄宿学校の2機関。

(2)高等教育機関: 大学( 4年または5年間 ) コレージュ( 3年間 )

3. キルギス共和国における日本語教育

(1)概要: 1991年(キルギス共和国独立後)に国立民族大学に日本語学科設置、また、初等・中等教育機関の第一寄宿学校でも日本語教育が開始(「日本語教育国別情報( <http://www.jpj.go.jp> )」)。現在はキルギス日本人材開発センターが中心。

(2)初等中等教育機関

(データは「キルギス日本語教育機関基礎データ」(2005)による)

**東洋リツェ**: 8年生~11年生 計44名、教員4名(うち邦人1名)

**第一寄宿学校**: 7年生~11年生 計171名、教員1名。

(3)高等教育機関(データは2007年時点)

**ジュスツップバラサグン名称キルギス民族大学**: 東洋学学部日本語学科(第一専攻、計99名)、歴史学部(第二専攻、計49名)、国際関係学部(第二専攻、計45名)

教員は東洋学学部国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊の隊員1名。

**カラサエフ名称ビシュケク人文大学**: 東洋学国際関係学部(第一外国語、第二外国語専攻合わせて計207名)、邦人教員4名(うちJICAの青年海外協力隊員1名)。

**アラバエフ名称キルギス国立教育大学**: 東洋言語文化大学東洋語学科(昼間コース計58名、夜間コース計17名)

**キルギス・ロシアスラブ大学(副専攻)**: 計26名、現地人教員2名。

**中央アジア・アメリカ大学(副専攻)**: 計20名、現地人教員1名。

地方都市大学: **国立オッシュ大学**、**ジャララバート大学**(学習者数等は不明)

(4)一般教育における日本語教育

**キルギス共和国日本人材開発センター**: キルギス共和国の市場経済化に向けた改革と

人材開発、日本とキルギス共和国の相互理解の深化、協力関係の拡大を目的として設立

( <http://www.krjc.kg/jp> /参照)。日本に関心があり、両国の文化交流に参加する意欲がある全ての人を利用できる。1995年から日本語コース開設。現在、入門、初級から中級までを4年間で修了する一般クラス、上級クラス、日本語能力検定試験1級対策講座、日本語の基礎を学び日本に親しむビデオクラスなどがある。

**オリンブ**: 韓国語・中国語・英語など語学に特化した学習塾。日本語も教えている。

(5)日本語教員の現状

日本語教師だけの収入で生活するのは、邦人および現地人教員にとって非常に困難。日本語教育に対して熱い情熱とボランティア精神がないとやっていけないのが実情。

(6)日本語学科修了者の卒業後の進路

日本関係の会社への就職は非常に難しく、教員は尊敬されても給料が非常に安い

め教員を志す学生はあまりいない。JICA 等のボランティアに頼るのが現状である。

### (7) 日本への留学

留学手段は、私費、政府や財団・大学の提携校の奨学金。日本政府（文部科学省）による奨学金留学生制度および教師を対象とした留学制度もある。平和中島財団および JASSO 財団の奨学生として国土館大学に留学した事例がある。

### (8) 日本語能力検定試験

非常に高い金額を支払って隣国で受験していたが、キルギス日本語教師会の再三の申請により、2006年12月に初めて国内で実施された。

### (9) 日本語学習者の特徴

日本人学生より比較的元気で素直であると感じた。「書く」ことよりも、「話す」ことを得意としている学生が多いと感じたが、筆者が実施したアンケートの結果では、最も苦手なのは「話す」ことである学生が最も多いという興味深い結果が得られた。

## 「日本語教育の現場から考えたキルギス共和国と日本との関係」

加藤 奏

### 1. はじめに

2007年9月から2008年2月にかけて私はキルギス国立民族大学での日本語教育インターンシップを経験した。その経験をもとに報告しようと思う。

キルギスの日本語教育は1991年のソ連邦からの独立と同時に始まった。日本語教育の歴史は浅いが、訪れる前の予想より日本語教育は盛んであると感じた。キルギスでは高等教育はもちろん、数は少ないが初等・中等教育で第二言語として日本語教育を行っている機関が存在する。また、日本のODA事業で作られたキルギス共和国日本人材開発センターの存在は大きい。そこでは、日本語教育はもちろん、NHKのテレビ番組が放送されていて、日本の図書やビデオ・DVDもそろっている。青年海外協力隊の中で日本語教員として勤務している方、自分の勤務先（障害者施設等）で日本語や日本文化の紹介をしている方もいて、日本語の広がりを感じた。

### 2. 学習者の減少

しかし、キルギスの日本語教育現場は様々な問題を抱えている。何と云っても、まず日本語学習者の減少があげられる。インターンシップ中に現場では日本語学習者が減少していることを実感した。

私が授業を行っていた国立民族大学では3年生から5年生は15人程度だが2年生は6人、2007年9月入学の1年生は3人まで減ってしまっている。新学期になり、私が担当した学生数も予定より少なくなるなど、諸事情で大学をやめていく学生も多かった。結婚して家族のためにお金を稼がなければならない男子学生も、子どもが出来たために家庭に入らなければならない女子学生もいた。どちらにも共通しているのは習得した日本語を活用できる就職先はないので、日本語を学習するのを止めるということである。

現地には日本企業もなく、習得した日本語を生かして働くことが出来ないのである。日本語を勉強しても将来の就職に役に立たないと考える学習者が多くなって、結果として日本語の学習者が減少するのである。また、中国が隣国であり、多数の中国人多数の中国製品が流入しているため当然中国語などの人気が出ているからでもあろう。

### 3. 日本とキルギスとの経済関係

ここで、日本とキルギスの間に経済的なつながりをみてみよう。外務省のホームページ（[www.mofa.go.jp](http://www.mofa.go.jp)）によると、2006年の日本からキルギスへの輸出が主に自動車、ゴムタイヤで12.3億円である。これに対して、キルギスから日本への輸出は主にアルミ合金、非鉄金属で約3,516万円に留まる。キルギスへの日本の直接投資は無く、1994年に日本企業14社から設立された日本・キルギス経済委員会も2005年より休会している。田中哲二講演（2007）によれば、現在のキルギスは日本の民間企業による民間レベルの協力を希望しており、それは鉱山開発、太陽光発電用のポリシリコンの開発、レアメタル開発、水力発電開発、農産物加工等の技術であるという。

日本によるODA（政府開発援助）の協力は盛んである。同じく外務省のホームページによると、2006年までの有償資金協力は256.65億円、技術協力は79.18億円、無償資金協力は105.43億円である。現在の日本は、対キルギスのODAとしてアメリカ、ドイツに続く支援実績がある。しかし、現在のキルギスは有償資金協力による対外累積債務（借金）が危機的状況にあり、ODAなどの政府間レベル交流より、民間レベル交流による経済活動の活発化を希望しているという。

日本とキルギスの間に、より活発な経済交流が必要なのである。日本語教育もこの経済交流を抜きにしては

考えることは出来ないと思う。対等な交易関係と資源の確保や両国の友好関係など両国間には改善すべきことが多い。戦後、アジアの中でいち早く経済成長を遂げた日本の高度な技術協力はキルギスの経済を、日本語教育のゆくえを変えることになるかもしれない。キルギスの日本語教育の未来は、相互理解と、日本の民間企業による民間レベルの協力を懸かっているといっても過言ではない。

#### 4. おわりに

そもそも、なぜ日本語教育を行うのだろうか。インターンシップの経験からこの疑問を強く感じた。学習者が習得した日本語を生かして働くことができないため日本語を勉強しても就職につながらないという事実を目の前にしたからである。

グローバルな時代である現代では、相互理解をするための円滑なコミュニケーションができるようになることは必要なことである。日本語教育がその国の経済活動を活発化させ、社会・経済の安定と発展をもたらすことにつながればいいと考えるが、現状ではそのようなつながりは難しいとわかった。インターンシップの経験は日本においては考えもしなかったことを考えるきっかけとなり、その意味でも良い体験になったと思う。

### 「キルギス国立民族大学における日本語教育 コミュニケーションにつなげる教室活動」

若菜 結子

#### 1. はじめに

私はインターンシップに参加するにあたって、コミュニケーションにつなげる教室活動に焦点をあてることにした。国土館大学での日本語教育実習のとき、実習生が良いと思った授業が学習者に受け入れられず、実習生が自信のなかった授業が学習者に受け入れられ、意外にうまくいくパターンに興味を持ったからだ。そして、教室活動の中で文型練習から実際のコミュニケーションにつなげる応用練習をどう作成すれば学習者にとって効果的なのかを考えて、実際の授業を行った。2007年9月から2008年2月までキルギス国立民族大学で実際に使った応用練習について、今日はその一部分を報告したいと思う。

#### 2. 教室活動の実例

##### 例1 『みんなの日本語』 第47課 学習項目「～ようです」

人数：7名 王様は誰だ？

2つのチームに分かれる。各チームで王様を決める。相手チームには王様は教えない。相手のチームに自分の王様について説明する。交互に、「王様は～です」この場合は「王様は～ようです」で発表する。チームで相手チームの王様が誰か考える。最後に一せいに「王様は～さん」という。当てたチームが勝ち。

このゲームはまず、ルールを説明することを重視した。ルールを理解しなければ内容が中途半端になり機能も弱まるからだ。わたしはルール説明のプリントを準備してまず学生に黙読させた。それから、音読し、半分の学生が理解した。そしてもう半分の学生は理解した学生に母国語で説明してもらい解決した。今日は「～ようです。」を使うことを説明した。チームは力が偏らないように前もって私が決めておいたチーム分けにした。1チーム4人。4つヒントを考えてもらって、1人ずつ発表することにした。人数が足りなかったので私もチームに加わった。

<実際に学習者が出したヒント>

- ・王様は運転することができます。
- ・王様は背が高くないようです。
- ・王様の髪が黒いようです。
- ・王様は髪が短いようです。
- ・王様はサッカーが好きようです。
- ・王様は恋人がいるようです

王様を当てたチームにはポイントが入る。結果はAチームの圧勝。このゲームのよかったところはチームの4人全員が友人(王様)の特徴を考えて文を考えることができたことと、書くのが嫌いなキルギス人があとで発表するので忘れないように自然とメモしたことである。相手チームのヒントをきくために学生同士で「静かにしてください。」と言いつつ、相手の話を集中して聞くことができたこと、相談タイムで相手チームの友人のこともよく観察し考えることができた。相手への観察力、そして、学生の新しい発見に繋がったと思う。学生同士が今まで知らなかった、恋人がいるとか、車を運転できるとか、友人のことが発見できたことも活発な活動になった原因だったようである。「～さんは恋人がいますか？知りませんでした。」とか「ど

こへ旅行に行きますか？」と、自然と日本語が出てきて良かったと思う。

### 3. キルギスでの教室活動で重視したこと

キルギス人は会話好きなどから、彼らにコミュニケーション練習やゲームは受け入れられやすい。これらを進める上で重要なことは、4つ考えられる。1つめは説明の重要性である。説明をおろそかにすると学習者が教室活動の中身を理解できず、授業内容があいまいになる。そして、目標言語が達成できない。私は導入・練習でも、これから何をするのか学習者に伝えることを心がけた。特に応用練習は全員がうなずくまで何回も説明した。応用練習に関して、説明の手間を考えると内容は複雑なものより単純なものが良いかもしれない。2つめは実践につながる練習をすることである。コミュニケーションの練習はいつか実際に使うことを想定したほうが良い。キルギスの場合、日本語学習者が実際に日本へ行けるのは一握りであり狭き門であり、日本の情報もあまり入ってこないの、学習者にとって日本はイメージである。そうすると、まず、キルギスで日本語を使う場合を考える。相手は日本人教師、ボランティアスタッフ、大使館職員、留学生、旅行者となる。特に学生は同世代の日本人に興味があるため、目上の方との会話より旅行者と会話することを好んだ。3つめは練習をする上で教師は学習者の文化・習慣・性質を理解することが大切だということだ。文化・習慣がわからなければうまくコミュニケーションが取れず授業が進まない。例えば「すき焼きを食べます」など食べたことがない日本料理より、「ラグマンを食べます」とキルギス料理を例にしたほうが頭に入りやすくなる。道の説明練習をするにしても、日本の地図を使うより自分の町の地図を使ったほうがわかりやすい。身近なところからスタートするのが効果的だ。家族や親類を大切にし愛国心が強く、外国人がキルギスをどう思っているのかが気になる。口癖は「キルギスはどうですか」だ。その上、「私にとって～」をよく使い、キルギス人としてひとくりにされるのを好まず自己主張が強い。そして、集中力がなく飽きやすいため同じパターンのゲームは受け入れない。これらのことを理解するには長時間かかることだが、理解するとより充実したコミュニケーション練習が可能になったことがわかった。

4つめは、逆に学習者も日本文化に触れる機会を作ることがかなり重要だと思う。まず、私は身近なところから、キルギスに比べ祝日が多い日本について、こどもの日や秋分の日などの説明をした。授業を始める前に、「今日、日本は休みです。」といてその理由を説明する。それ以外にも茶道や書道、日本料理、音楽やドラマやアニメを見て日本の日常生活や文化を知る機会を作った。こうすることで活動がしやすくなり、教師と学習者の「日本とキルギス」という共通の話題が生まれるようになる。つまり、異文化理解することでコミュニケーションが成立するのだとわかった。以上が、キルギス国立民族大学における応用練習についての報告である。

### 4. おわりに

これらのことから、応用練習を通して日本語教育もキルギスの文化に深く関係していると感じた。日本語を教えるということは一体どういうことなのかと改めて考えさせられた。教師は言葉を教えるだけでなく、学生に自分自身を理解してもらい、また学生を理解することが第一に大切だと思う。学習者の文化を受け入れ、その文化とどのように協調していくかが、今後の応用練習でも日本語教育全体でも課題になると思う。

## 「キルギス国立民族大学・ビシュケク人文大学における日本語教育」

谷内 美奈

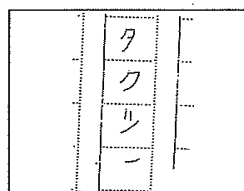
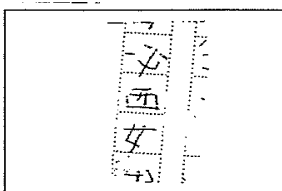
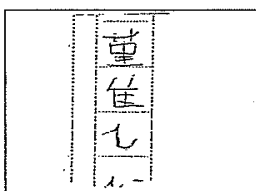
### 1. はじめに

国立館大学 21 世紀アジア学部 3 年次に日本語教育インターンシップとしてキルギス国立民族大学に行き初級クラスを担当し、大学院グローバルアジア研究科国際日本語教育専攻時にキルギスにある民族大学と人文大学で中級クラスの日本語教育実習を経験した。

### 2. 弁論大会用作文の添削

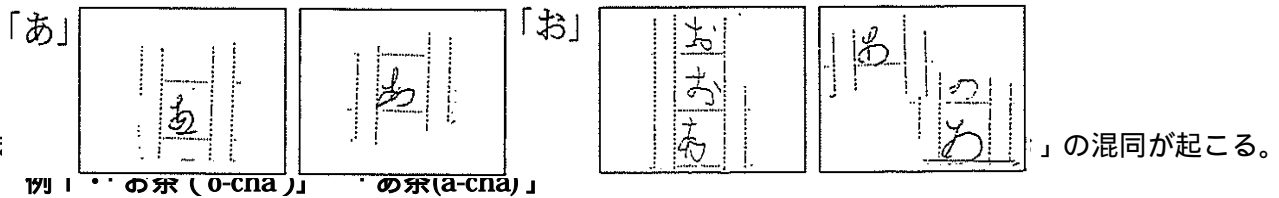
作文コンクール・朗読コンクール・弁論大会などの準備の「作文の添削」では、どのように表現を変えるべきか、どこまで自分が介入していいのかが私にはわからず、学習者の個性を残した文章で各大会の優勝を狙うことの難しさに苦労した。特に、弁論大会は学習者にとって日本へ留学しやすくなる重要な大会であり、学習者が独学をするいい機会にもなるが、辞書の質が悪く図 1 のような漢字の間違いがしばしばみられる。また、指導がいきわたらない結果、図 1 の「タクシー」のような間違いが起こった。これらは授業での板書を縦書きにすることで改善された。

図 1 漢字「難」の例      漢字「要」の例      カタカナ「タクシー」の例



キルギスの日本語学習者は普段母語のキルギス語・ロシア語を筆記体でつづるため、ひらがな導入直後の学習者の文字に、図2のような「あ」と「お」の区別できないものが現れる。

図2 ひらがな導入直後の学習者による表記の例



これはロシア語が、単語の頭文字に「母音の O (オ)」があり最後の文字に「母音の A (ア)」がある場合に、頭文字の母音の「O (オ)」の発音が「O (オ)」から「A (ア)」に変化する特徴があるためといえる。中級クラスの学習者になるとこの発音の誤りは少なくなる。

この他にも例2のような誤りが上級クラスの学習者にも多くみられる。

- 例2. 「おにいさん (お兄さん)」 × 「アニイサン」
- 「おねえさん (お姉さん)」 × 「アネエサン」

#### 4. ロシア語の干渉：場所を表す助詞の「に」と「で」の混同

翻訳をしながら日本語を作文する学習者に最も多くみられた助詞の間違いに場所を表す助詞の「に」と「で」がある。

・場所を表す助詞の「に」と「で」の誤用

- 例3 「私は、公園に行きました。」 「私は、公園で行きました。」
- 例4 「デパートで遊びました。」 「デパートに遊びました。」
- 例5 「デパートに遊びに行きました。」 「デパートで遊びに行きました。」

学習者が場所を表す助詞の「に」と「で」を混同する理由にロシア語における場所を表す2つの冠詞の性質が挙げられる。これはロシア語の特徴を知らなければわからないことだった。ロシア語の場所を表す冠詞の大きな特徴は次の4つである。

・ロシア語の場所を表す冠詞の4つの特徴

- (1) 場所を表す代表的な冠詞が2つある。
- (2) 冠詞の直後に来る場所を表す名詞によって置かれる冠詞が異なる。
- (3) 冠詞の直後にくる場所を表す名詞が、屋根のある建物を表すのか、屋根のない場所を表すかという空間の違いで使う冠詞が異なる。
- (4) 上記の(1)(2)(3)の条件以外で使われる特別な名詞が多い。

このような場所を表す助詞の「に」と「で」に対し、ドリルを数多く取り入れ集中講座を実施したが、すでに覚間違って文法を覚えてしまった知識を直すことは大変難しい。そして、日本語の文法の特徴をしっかりと理解し、授業に取り入れることの重要性を知った。

#### 5. 初級と中級の違い

授業の形式としては、初級クラスと中級クラスでは授業の進め方を変えた。既習語彙の少ない初級クラスでは、言葉の意味や文型を一つ一つ追うような長文読解を行ったが、初めて関わる中級クラスでは自発的に話を組み立ててもらえるように全体的な解釈を中心に読解を行った。また、会話の授業では、学習者同士が自由に日本語で会話ができるように教師が会話に参加し話の流れを動かすという授業を取り入れたが、学習者同士の会話の橋渡しができず失敗した。この他、日本人旅行者を授業に交えて学習者と自由に話してもらい、自分は会話の外で見守るという授業を行った。教師が参加する会話の授業よりも、この見守る授業の方が自分に合っていたように思う。

#### 6. おわりに

初級段階の日本語の授業を組み立てるには、文法的な知識が必要かつ重要である。また、母語の違いからくるコミュニケーションの取り方や、文法的な誤用の傾向が様々である。この他各大学、各学部、各担当教師の違いでクラスの性格は変わり、さらに学生の個性と日本語の習得率の違いから各学習者に技能の差があるため、教師として幅広い知識や、どのような授業にするかという工夫、また臨機応変に対応できる能力が試された。

教師としてだけでなく日本人としての役割を求められる日本語教師は様々なことで対応を求められるものであるといえる。

### 「キルギス国立民族大学・ビシュケク人文大学における漢字教育」

町田 佳帆梨

#### 1 はじめに

漢字に対する苦手意識をなくし、さらに漢字学習をしていこうとする意欲を向上させるには、どのような方策があるか。そして、特別な道具や教材が手に入りにくい状況にいる海外在住の学習者にとって漢字教育の効

果的な教え方や学習方法とはどのようなものであるか。2006年から半年間キルギス共和国国立民族大学を中心に行った漢字授業を報告する。

## 2 漢字を絵で表す学習方法

### (1) 漢字を全面に出すタイプ

一部分だけを絵にしたもの

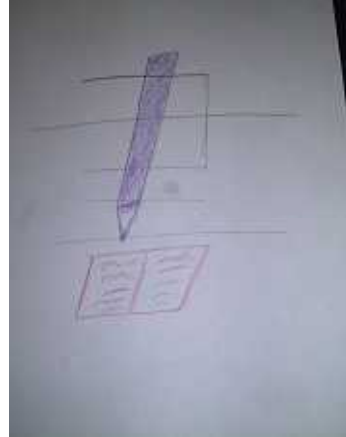
(例1)「酒」



(例2)「町」



(例3)「書」



象形文字のような形を意識したもの

(例4)「雨・山・車・川」



(例5)「山・田」



### (2) 絵の中に漢字を当てはめるタイプ

(例6)「太」



(例7)「鳥」

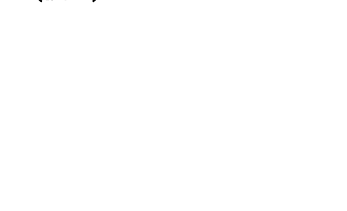


(例8)「兔」



### (3) どちらとも捉えられるタイプ

(例9)「男」



(例10)「立」



(例11)「火」





(4) 例外  
(例 12)「作」



### 3 おわりに

学習者から漢字は難しいという意識はなかなか消えない。こうした学習者の漢字に対する苦手意識を和らげるために、漢字を絵で表す学習方法を考案した。教材・教具が少なく簡単に手に入りにくい海外の学習者のためには、非常に適している学習方法であることが分かった。また、漢字を絵にする方法の最大の利点は、学習者のモチベーションの向上である。体と頭を使うことで、学習者が漢字を1つずつ見る機会ができ、漢字を分解する力が養われる。また漢字の意味と形を同時に理解することができる。

今後の課題を3つ挙げる。1つ目は、海外の非漢字圏学習者の漢字を読む力を伸ばすための教授法の考案である。2つ目は、教材や参考書ばかりに頼るのではない、学習戦略を確立するための授業の提案を続けることである。3つ目は、漢字を絵で表す教え方は、キルギスだけではなく他の非漢字圏の学習者にどのような効果があるかということである。

漢字を絵で表す活動を行った結果、学習者の漢字学習のモチベーションを保ち漢字をイメージに置き換えることができた。この活動によって学習者の興味を引きだすことができたので、今後は漢字の定着を促すように教授活動を行いたい。

#### 「キルギス国立ビシュケク人文大学の日本語学習者に対する効果的な教室活動」

五十嵐 順

##### 1 キルギスにおける効果的な教室活動

ここでは、実際に授業を行って学習意欲の向上に効果的であったと感じたものを取り上げてみたいと思う。

##### 1.1 学生や現地の先生のキャラクターを用いた例文

これは、クラスでの各学生のキャラクターを使って新出文型や語彙の導入、練習をさせるというものである。そのクラスでのお互いの印象、共通のイメージを持っていなければ、この方法はあまり意味がない。学生がお互いを観察して自発的に作成することが多く、一般的な事象よりもこのような個人的な事柄に関する例文を用いたほうが自分たちの状況と結びつけて考えることができる。単調な教室活動を活発化させるために、刺激的な例文を入れることもある。ただ、個人的な事柄に関しては学習者に不愉快な思いをさせる恐れもあるので、注意する必要がある。

例。「お酒を飲みすぎてどこへ行ったか覚えていません」

「さんはダンスだけでなく、歌も上手です」

「いつもうるさい　　さんが、静かに授業を聞くわけがない」

### 1.2 教科書にある例文の固有名詞を身近なものに置き換える

教科書も進めば進むほど、「渋谷」「三鷹」「軽井沢」などの地名、「宅配便」「新幹線」などのキルギスに馴染みのないものが増えてくる。そこで、既習の語彙を用いた例文を別に用意して導入するようにした。日本語を勉強するということは、日本の文化や社会も当然学ぶことになり、彼らがそれらに大変興味を持っていることも事実である。だが、キルギスという国に関しては、日本とは経済的、文化的に異なる部分が多く、地理的にも遠いため簡単に行き来することも容易ではない。

例、「電車の中で居眠りをして、乗り越しそうになったことがある」

「トローリーバスで居眠りをして、乗り越しそうになったことがある」

「コンサートの時、くしゃみが出そうになったが、がまんした」

「この前の弁論大会の時、くしゃみが出そうになったが、がまんしました」

「駅で押されて、階段から落ちそうになった」

「学校の前のナロードリー(スーパーマーケット)で、　　さんに押されて、階段から落ちそうになりました」

### 1.3 視覚的効果をプラスする

実際に教室で実演してみれば、口で説明するよりも大変効果があった。これは彼らの意識を集中させることが出来るだけでなく、演技に面白さも加えればクラスの雰囲気も良くなり、次の活動に良い流れを持って繋げることができる。私の場合、これをなるべく大げさにやることにしていた。その方が学生の反応もいいし、教室全体が笑いで溢れ、楽しい活動へと発展するからである。

### 1.4 例文は数多く用意する

面白いだけの授業で終わってしまったら全く意味がない。学生に新出語彙を覚えてもらうためにも、例文を数多く用意することが大切になってくる。

### 1.5 ゲームの要素を加える

これは、学生に興味を持たせ学習意欲を高めるのには大変効果的であった。普段は、授業に対してあまり関心を示さなかった学生であっても、積極的に取り組む態度を見ることが出来る。だが、問題点がないわけではない。ゲームに頼りきってしまうと、勝ち負けにこだわってしまい本来の学習目的から外れてしまうこともある。

例．伝言ゲーム

穴埋めゲーム

## 2 成果・課題

キルギスという国で日本語を教えたという“経験”が私にとっての何よりの成果である。その経験から学んだことの一つとして「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」ということが挙げられる。教え方が違えば、学生の“反応”も異なってくるのは当然である。また、その反応がどのようなものかを知らなければ、その場限りの授業になってしまう。反応を知るためには、“観察”を怠ってはいけぬ。大切なことは学習者をよく観察することだと思う。クラスの中で、学習者一人一人の個性を見極めて知ることによって、初めて授業活動ができるようになる。また、「教科書で教える」ということは具体的にはどうすればよいのであろうか。教え方が一つではないように、その答えも無限にあるように思える。だが私にはまだ、具体的に一つ一つ効果的な例を挙げることができない。まだまだ経験不足であり、「どのように教科書で教えるか」がこれからの課題である。

### 「ベトナムホンバン大学における日本語教育とその問題点」

ラム チン ティエン ホアン

#### 1.はじめに

私は国士館大学大学院グローバルアジア研究科修士課程国際日本語教育専攻において、2006年9月から2007年3月までの半年間、ベトナムのホーチミン市にあるホンバン大学で、「国際日本語教育実習」を行った。その時の経験からみたベトナムにおける日本語教育の問題点について述べる。

ベトナムにおいて日本語教育の開始は他の言語に比べてかなり遅れたが、近年日本との経済、ビジネス、文化等の交流がますます進展しているからなのか、今は非常に盛んで、多くの学習者がいる。国際交流基金の2006年の調査では学習者人口は約3万人ということだが、実際には更に増加していると思われる。

#### 2.教授法について

私は、日本語教師になるために、国土館大学で「日本語教員養成課程」を受講していたので、実習の時はなるべくベトナム語を使わず日本語だけで授業をしようと試みた。やはり、すべて日本語で教えることはできなかった。これについては次の二点に原因があると思う。1つめは、母国で日本語を教えていることである。母語で教えれば早く容易に説明することができるからだ。もう1つの原因として、ベトナムでは日本語だけで教えることに学習者が慣れるまで時間がかかることがあげられる。何回も日本語を教えることを繰り返し、完全に日本語だけを使って教えるまでには、かなりの時間が必要だろう。

効果ある授業とは、学習者に理解できるようにさせ、学ぶことの楽しさと面白さを知らせることではないだろうか。教師が学習者に日本語だけで教えるから楽しく良い授業であるとは言えないと思う。日本語で教える方法であっても、媒介語を使う方法であっても教授法の工夫次第である。

### 3. ベトナムでの日本語教育の問題点について

まずは、学習者の問題である。日本人の教師によると、ベトナムでの学習者の問題といえば、いつまでも発音が正しくならないことだそうである。間違いやすいのは特に「つ」と「ちゅ」、「や」「ゆ」「よ」と「じゃ」「じゅ」「じょ」あるいは「ざ」「ぞ」などである。北部の学習者は方言のせいかわ「や」「ゆ」「よ」は全くできない。

イントネーションとリズムも問題である。1つの文を読むとき、日本人は助詞を弱くして名詞を強くゆっくり読むが、ベトナムの学習者は反対のことをしてしまう。つまり、いつも助詞が強すぎて、長すぎ、はっきりさせすぎる。この理由は、たぶん文法を教えるときに教師は学習者に新しい助詞を特別に注目させたがってそう発音したのを、学習者はそのまま言う習慣が身につけてしまったからだろう。授業中は発音の練習をきちんとしないままに進んでいるので、上手に発音できる学習者は少なくなってしまう。

発音の問題とも関連するが、ベトナムの日本語教育の問題点といえば日本語を話す力が育たないことがあげられる。原因については次の3つが考えられる。

1つめはカリキュラムから考えられる原因である。会話の練習時間は少ない。それに授業時間以外、或いは教師以外、学校の側から日本の企業や会社、町などで日本人と接して日本語を話せる場面や機会を作ることがあっても少ない。学習者は授業以外に全然日本語を使わないことになる。2つめの原因は学習者にある。学習者が文法をしっかり学習し、語彙などにも深い知識を持っているのに、日本語が使えないし応用もできない。3つめの原因については日本語教育のシステムをいかなければならない。文法・語彙に注目しすぎ、場面に応用することを大切にしない。そのせいか、大学や日本語学校の学習者は文章を読む力、書く力はあるが、話す力は弱い。質問するのはほとんど教師のほうからで、学習者から教師に向かって質問することはめったにない。話したくても間違ったら笑われるかもしれないという気持ちを持っている学習者が多い。だから、いちばん安心する方法は日本語で話さないようにすることだと思うだろう。

たとえ、日本語で話さなければいけない場面になっても、反応が遅く、しかも慌ててしまう。答える前に教師の質問を口の中でベトナム語に訳して、それから答える。急に日本人の客などが教室に来たら、客に質問したり答えたりすることがうまくいかない。これは、英語教育の問題点と同じ状態だと思う。

### 4. おわりに

国際日本語教育実習を通じ、また違う立場に立って国での日本語教育のことを見直すことができ、以前には気が付かなかったことなどが見えてきた。今回はベトナムにおける日本語教育の主な問題点について述べた。私はこれからも日本語教育について研究を続け、ベトナム人学習者にあった日本語の教え方を更に工夫していきたいと思う。